

週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、

お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています
日本基督教団 西宮公会教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

(前週よりつづき)

中でも後者は、2025年10月25日のヨハネスブルクの「第23回ネルソン・マンデラ財団年次講演でのアルバネーゼ自身の講演「正義よ、私たちの嵐となれ」で、繰り返しその意図が言及されています。

それが南アフリカであり、ネルソン・マンデラ財団年次講演であるのは、そのネルソン・マンデラの南アフリカが、国際法に基づいて、イスラエルによるガザ・パレスチナ攻撃をジェノサイドと断定し、国際刑事裁判所に告訴した、数少ない国の中心であったからです。

その講演の「今私たちは、イスラエルがパレスチナを追い込んだ地獄に無関心になってはいけません。ジェノサイドが始まって2年、停戦が宣言されたにもかかわらず、パレスチナ被占領地は——この言葉をあえて使いますが——『アポカリプティック』つまり終末的としか言いようがない状況です。ガザは瓦礫とごみ、遺体の残る荒地となり、生き残った人々が、今世紀、他に類を見ないような容赦ない暴力や病気、貧困の中を懸命に生きようとしています」「24万人以上の人々が殺害されたか餓死しており——専門家はもっと多いだろうと述べています——その数は日々増えています。地域全体が破壊し尽され、家の廃墟に戻っても、瓦礫から出てくるのは愛しい家族の遺体だけ。街区は粉塵と化し、清潔な水は不足し、食料はほぼ手に入りません。医薬品と電気は極度に不足しています。人質となった人々は、拷問されレイプされ、遺体は切り刻まれ、冒瀆され、道に捨てられています。家や思い出は壊され、私生活も奪われ、もはや住めなくなった土地で人々は幾度となく強制的に住む場所を追われ、もう逃げる場所も変える場所也没有せん」「広範囲に及ぶこの耐え難い苦しみは、意図的かつ組織的に計画されたものであり…」。

記述は、主に具体的に、パレスチナ・ガザに対するイスラエルによるジェノサイドに言及するのですが、その

訴えは、何よりも、世界に対するその非道の訴えであると同時に、依って立つのは、その南アフリカの、アパルトヘイトと闘ったネルソン・マンデラの「私たちが自由を手にしたとき、他者が直面している苦しみに無関心になってしまう危険がある。それは人間にしてあるべき姿ではない」の言葉に、繰り返し戻って行きます。

講演の結びは、その南アフリカから、マンデラの言葉に立って「お別れの前に、この南アフリカの地からパレスチナの人々にメッセージを送りたいと思います。何が起ころうとも、パレスチナは、この激動の歴史の1ページを、自らを征服者と称する者たちの物語の脚注としてではなく、何世紀にもわたる物語の新たな一節として綴ることになるでしょう。不正当に対して、植民地支配に対して、そして自由の名を騙る独裁者に対して、いつにも増して力強く立ちあがった人々による、新たな一節として」としています。

前回の2つの書物の「紹介」の冒頭の言葉も、それを引用する言葉にも、このフランチェスカ・アルバネーゼの「パレスチナの人々にメッセージ」にあたるものは書かれていません。書かれているのは、せいぜい『私たち』は『傍観者』ではあり得ない」です。

「国連人権理事会、ガザ・ジェノサイド報告書」もアルバネーゼの「ガザへの集団犯罪／私たちはいかにジェノサイドに加担しているか」の私、ないし私たちは、「傍観者ではあり得ない」ではなく、ジェノサイドのガザ・パレスチナの人々に、直接「何が起ころうとも、パレスチナは、この激動の歴史の1ページを」「物語の新たな一節として綴る」と語りかけるのです。

そこで起こっている事を、「ジェノサイド」と断定し、その当事者であるパレスチナ・ガザの人たちに向って、ひるむことなくメッセージを送る事が、果たして他の誰にできたのだろうか、と思わせられながら、講演を読むことになりました。

(次週につづく)